

# モーリシャスにおける華人社会の変容と ポートルイスのチャイナタウンの地域的特色

山 下 清 海

## 目次

- I. はじめに
  - 1. 問題の所在
  - 2. モーリシャスの概観
- II. モーリシャスにおける華人社会の形成と変容
  - 1. モーリシャスの開発と移民
  - 2. 華人社会の形成
  - 3. 華人社会の変容と特色
- III. ポートルイスにおけるチャイナタウンの地域的特色
  - 1. ポートルイスおよびチャイナタウンの周辺
  - 2. チャイナタウンの地域的特色
- IV. おわりに

## I. はじめに

### 1. 問題の所在

華人社会に関する研究は、歴史学・文化人類学・社会学・経済学・政治学・教育学・文学などさまざまな学問分野からアプローチがなされてきた。そのような中で、地理学からのアプローチの特色は、華人の集落（チャイナタウン、華人村落など）に関する研究、および各地における華人社会の地域的特色の究明であろう（山下、2002：9-13）。そこで筆者は、チャイナタウンに焦点をあてながら、世界各地の華人社会の地域的特色に関する比較研究に取り組んできた（山下、2000；Yamashita, 2013）。また、ブラジルのサンパウロ、インドのコルカタ、東京都豊島区の池袋などを対象に、華人社会・チャイナタウンの形成、変容、それらの要因などにつ

いて考察してきた（山下，2007，2009，2010）。

世界各地に華人が広く分布していることについて、中国では「凡是海水所到的地方，就有華僑」すなわち「海水の至ところ華僑あり」と言われてきた。Chang (1968) は、華人の分布と職業についてグローバルスケールで論じ、それらの特徴的なパターンを見出した。その研究の中で、1810年、ブラジルで茶の栽培を始めるためにサンパウロに華人労働者が導入されたのが、新世界におけるおそらく最初のアジア人コロニーであり、インド洋においては、1830年に最初の華人がモーリシャスのポートルイスに現れたと述べている。本研究の対象とするモーリシャス共和国（以下、モーリシャス）は、華人の世界的展開を考える上で、非常に重要である。しかしながら、モーリシャスの華人社会に関する学術的な研究は少なく、特にフィールドワークにもとづく研究成果は極めて乏しい。

まず、モーリシャスに関する先行研究について整理しておくことにする。モーリシャスの地理学的研究では、寺谷の一連の研究がある（寺谷，2003，2004，2005）。また、堀内（1995）、寺谷（2008）、戸谷ほか（2010）は、地誌学的立場からモーリシャスの地域的特色について総合的に論じている。

モーリシャスでは、後述するようにインド系住民が多数を占めるが、インド系移民に関しては、杉本（1999）をはじめ研究の関心が高い。しかし、モーリシャスの華人社会に関する研究は少ない。植民地時代に華人に関する若干の記録が残されており、これらが貴重な資料となっている。陳主編（1984：258-262）は、歴史的資料にもとづき、イギリス領モーリシャス時代の華人の移住経緯や経済活動などについて論じている。方編（1986）には、モーリシャスの華人の歴史に関する貴重な文献資料が収録されている。李（2000）はアフリカ華人の歴史について総合的に論じる中で、モーリシャスの華人に関しても多く言及している。また、Pan ed. (1998: 351-355) および方・胡（2002）は、モーリシャスの華人社会の変遷と特色について要領よく概説している。

一方、モーリシャスのチャイナタウンに関する学術的な研究はない。李・陳編（1991：316-321）、沈（1992：239-247）、および呉編（2009：167-168）は、首都ポートルイス（Port Louis, 中国名：路易港）にチャイナタウンが形成されており、その華人社会は客家人が中心をなしていることなどを概説している。

先行研究の検討の結果、本研究では、モーリシャスの華人社会の変容を考察するとともに、ポートルイスのチャイナタウンの地域的特色を明らかにすることを目的とする。そのために華人の経済、社会、文化を総合的に分析し、それらの特色が反映されているチャイナタウンの土地利用および景観に焦点をあてる。モーリシャスにおける現地調査は、2014年2月に実施し、ポートルイスのチャイナタウンの地図を作成するとともに、華人団体、廟、華字紙の発行所、華人個人などからの聞き取りを中心にフィールドワークを実施した。

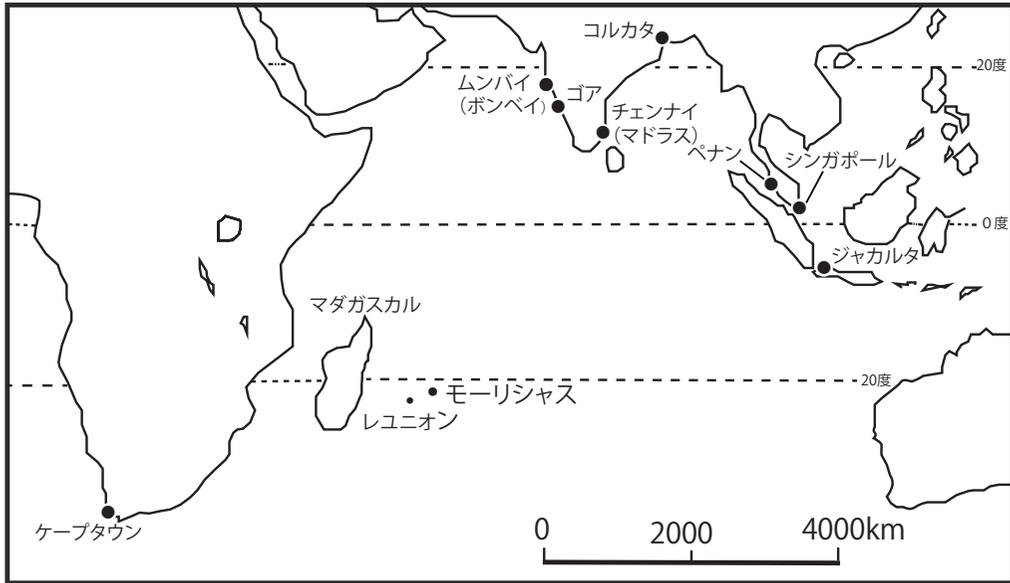


図1 モーリシャスの位置

(筆者作成)

## 2. モーリシャスの概観

本論を進める前に、前述した文献（堀内，1995；寺谷，2008；戸谷ほか，2010）などをもとに、研究対象地域であるモーリシャスについて概観しておく。

モーリシャスはマダガスカル島の東約900kmに位置する（図1）。モーリシャスは29の島々からなり、国土面積は2,040km<sup>2</sup>（東京都2,189 km<sup>2</sup>）で、主島であるモーリシャス島の面積は1,865km<sup>2</sup>（香川県は1,877km<sup>2</sup>）である。モーリシャス島は、インド洋ではマダガスカル島（587,041km<sup>2</sup>）に次ぐ面積を有する島である。

ポートルイスは、モーリシャス島の北西部沿岸に立地し、2011年の人口センサスによれば、総人口1,236,817人のうち、モーリシャス島に1,196,383人（総人口の96.7%）、モーリシャス島の東550kmのロドリゲス島に40,434人が居住している（Statistics Mauritius, 2011 Housing and Populations）。

モーリシャス島は、マダガスカル島およびレユニオン島とともに、マスカレン諸島を構成するが、マスカレン諸島の他の島と同様、火山性起源の島であり、緩やかな起伏をもつ地形が卓越し、残丘地形としての孤立峰の岩山が散在し、特異な山地景観がみられる。沿岸はほぼ全域サンゴ礁に覆われ、波の静かなラグーンやビーチが形成されている（写真1）。

モーリシャスは高温多湿な亜熱帯海洋性の気候で、11月から4月が夏季、5月から10月が



写真1 モーリシャス島北部のビーチリゾート, グラン・ベの海岸  
(2014年2月, 筆者撮影)

冬季となる。ほぼ南緯 20 度に位置するため, 南東貿易風地域に属し, 風上側の東部および中央部の中央高原が多雨地域となる。年間降水量は最も多い内陸部では 4,000mm 以上に達し, 最も少ない西岸では 800mm 未満である<sup>1)</sup> (寺谷, 2008)。

モーリシャスのエスニック・コミュニティの構成をみると, 1846 年以降の人口センサスでは, ジェネラル (General), 華人 (Chinese), インド系 (Indo-Mauritian) に分類されてきた。インド系はさらに宗教からヒンドゥーとムスリムに区分されてきた。ジェネラルは卓越するインド系移民との区別の含意から用いられるモーリシャス特有の人口区分カテゴリー語であり, クレオール (Creoles, 白人とアフリカ系黒人の混血) とフランス系住民 (Franco-Mauritians) を併せた概念である。1983 年以降の人口センサスでは, 所属コミュニティの調査がなされていない。所属コミュニティの最後の調査が行われた 1972 年の人口センサスをみると, 総人口 826,199 人のうち, ジェネラルが 236,867 人 (総人口の 28.7%) であるのに対し, ヒンドゥー教徒が 428,167 人 (同 51.8%), イスラム教徒 (Muslim) が 137,081 人 (同 16.6%), 華人が 24,084 人 (同 2.9%) であり, インド系が総人口の 68.4% を占めた<sup>2)</sup> (寺谷, 2003, 2008)。台湾側の推計によれば, モーリシャスの華人人口は 3 万人 (2011 年) であり, 総人口の 2.3% を占める (国立中正大学編, 2012:568-571)。また, 台湾発行の中華経済研究院編 (2004:287) は, モーリシャスの華人は 3 万人あまりであり, その 85% は広東省梅県出身の客家人であり, 華人の 15% は広東省の南海および順徳出身であると述べている。

モーリシャスの宗教別および言語別の構成を, 2011 年の人口センサスにより概観してみよう  
118 (910)

モーリシャスにおける華人社会の変容とポートルイスのチャイナタウンの地域的特色（山下）  
(Statistics Mauritius, 2011 Housing and Populations)。まず宗教別構成をみると、ヒンドゥー教徒 48.5%、ローマ・カトリック教徒 26.3%、イスラム教徒 17.3%、その他のキリスト教徒 6.4% などとなっており、インド系住民の多さを反映している。次に、家庭内での使用言語別の構成をみると、国民の多くは複数の言語を家庭内で使用している。モーリシャスの公用語は英語であるが、クレオール語 (Creole, フランス語を基本に、英語やアフリカの諸言語の単語を用いて簡略された言語) が広く使われている。クレオール語のみの使用者が全体の 40.5%、ボージュプリー語 (Bhojpuri, インドで使用されている言語) のみの使用者が 19.3%、フランス語のみの使用者が 1.6%、タミル語のみの使用者が 1.5%、中国語のみの使用者が 1.0%、英語のみの使用者が 0.1% などとなっている。その他にクレオール語とフランス語の併用者が 2.4%、クレオール語と中国語の併用者が 0.5%、クレオール語とタミル語の併用者が 0.4% など、複数の言語を併用している者が少なくない。

モーリシャスの経済をみると、植民地時代からサトウキビ栽培と製糖業が重要な役割を果たしてきた。今日でも、郊外では広大なサトウキビ・プランテーションが広がっている (写真 2)。モーリシャスは、1968 年、イギリス植民地から英連邦内の王国として独立<sup>3)</sup>、サトウキビ栽培・製糖業に依存するモノカルチャー経済から脱出するために、モーリシャス政府は、1971 年にアフリカ最初の輸出加工区 (Export Processing Zone) を設立し、輸出指向型の外国企業を誘致し、繊維・縫製業が発展した (寺谷, 2008)。これらの産業とともに、美しいビーチリゾート



写真 2 サトウキビ・プランテーション  
写真後方には、モーリシャス島特有の残丘地形が見える。

(グラン・ペ近郊, 2014 年 2 月, 筆者撮影)

トを活かした観光業も重要である<sup>4)</sup>。2013年度には、993,106人の観光客がモーリシャスを訪れ、国別にみるとフランス(24.6%)、レユニオン(14.4%)、イギリス(9.9%)、南アフリカ(9.5%)、ドイツ(6.1%)、インド(5.8%)、中国(4.4%〔香港を含む])の順であった(Mauritius, Handbook of Statistical Data on Tourism 2013)。

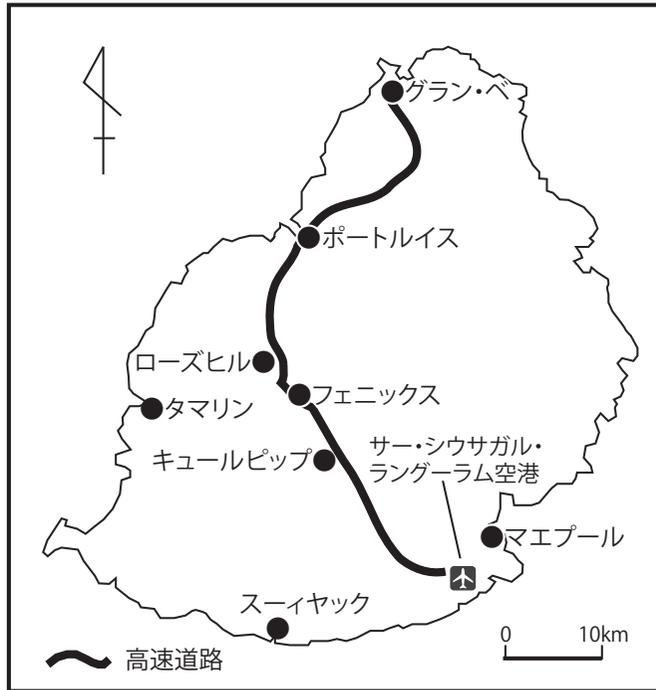


図2 モーリシャス島

(筆者作成)

## II. モーリシャスにおける華人社会の形成と変容

### 1. モーリシャスの開発と移民

モーリシャスの開発の歴史については、先行研究(杉本, 1999;寺谷, 2003, 2008;戸谷ほか, 2010)により、次のようにまとめることができる。

モーリシャス島は長く無人島であったが、古くからインド人水夫やアラブ商人の間では、ディナロビン(Dinarobin)島の名で知られていた。1513年、ポルトガルの海軍提督が同島を「発見」し、ヨーロッパ船舶の食料・水の供給地となった。1598年、オランダが同島の占領を宣言し、マウリティウス(Mauritius)と命名した。オランダはヨーロッパとアジアの中継地点として、

モーリシャスにおける華人社会の変容とポートルイスのチャイナタウンの地域的特色（山下）  
モーリシャスに着目したが、南アフリカのケープ植民地（ケープタウン）の確立（1652年）により、食料補給基地としてのモーリシャスの地位は低下した。

1639年、バタヴィア（現ジャカルタ）からサトウキビが導入され、入植が試みられたが、オランダ東インド会社は、1706年に同島の放棄を決定した。1715年、フランスが同島を占領し、フランス島（Ile de France）と名付けた。プランテーションのフランス人農園主は、フランス東インド会社を介して、同島にアフリカ奴隷を導入し、サトウキビ栽培を軌道に乗せた。

英仏戦争の中、1810年、イギリスがモーリシャスを占領、1814年のパリ条約により、正式にイギリスの植民地になった。同島はフランスからイギリスへ譲渡され、モーリシャスと改名された。1835年の奴隷解放令施行を見据えて、その前年の1834年、プランテーション農園主は、最初のインド人契約労働者を導入した。その後、インド系移民が増加し、1846年には、インド系移民が総人口の3分の1に達した。

イギリス植民地時代には、奴隷制が廃止され、インド人契約労働者が大量に移入され、サトウキビ・プランテーションおよび製糖業が発展した。イギリス領となった後にも、法律、学校制度、宗教施設などは、フランス植民地時代のものがほとんど変更せず受け継がれた。このため、国民の多くは英語よりもフランス語を主に話し、地名のほとんどがフランス語起源であるなど、フランス文化の影響は現在でも色濃く残存する。

## 2. 華人社会の形成

次に、華人に焦点を当て、モーリシャスにおいて、華人社会がいかにして形成され、変容してきたかについて検討する。

陳主編（1984：258-262）には、「非洲華工」（アフリカ華人労働者）の章が設けられ、その中でイギリス領モーリシャス島の項もある。華人に関する文献資料が乏しい中で、ここでの記述は重要である。これらの主な内容をまとめると、以下ようになる。

ポルトガルは、1505年にモーリシャスを占領し、アフリカから導入した黒人奴隷を用いて港や倉庫を建設した。オランダ東インド会社は、ポルトガルからモーリシャスを奪取した。

モーリシャスにおけるサトウキビ栽培技術は、オランダ東インド会社がバタヴィアから連れてきた華人によりもたらされたものである。1715年、モーリシャスはフランス東インド会社の手に渡った。フランス植民地時代に、モーリシャスのプランテーションは大いに発展し、サトウキビのほかに、綿花、インディゴ、クローブ（丁香）などの熱帯作物が栽培されるようになった。18世紀後半、サトウキビ・プランテーションや製糖工場の労働者は、アフリカから連れてこられた奴隷やインド人であった。

1810年、イギリス東インド会社がモーリシャスを占領した際、この島はすでに重要なサトウキビ産地になっていた。1824年前後、現在のマレーシアのペナンやシンガポールから数十人の

華人労働者が、モーリシャスに導入された。以後、イギリスやフランスのプランテーション経営者は、シンガポールやベナンから華人労働者を導入するようになった。華人労働者が最初にモーリシャスに来た際、プランテーションで働いていたのは奴隷であった。イギリスが奴隷制度を廃止した1834年には、コルカタなどから連れて来られたインド人が数千人いた。

現在のオーストラリアのイギリス領ニューサウスウエールズおよび南米のイギリス領ギアナに華人契約移民が導入される以前、すでに1843年、シンガポールとベナンから最初の華人労働者が、モーリシャスに移入され、サトウキビ・プランテーションや製糖業に従事した。

1921年、モーリシャスの人口316,681人のうち、インド人は264,884人、華人は6,820人であった。イギリス植民地では、マレー半島を除き、一般に華人よりインド人が多いが、モーリシャスも同様の状況で、南米のギアナやトリニダード・トバコとよく似ていた。

Pan ed. (1998 : 351-355) および方・胡 (2002) は、前述した陳主編 (1984 : 258-262) 掲載の文献に依拠しながら、モーリシャスの華人社会の歴史について概術している。これによると、華人は広東貿易で活躍したフランス商人のパートナーとして、モーリシャスに来たが、華人のモーリシャス定住の基礎を築いたのは、イギリスの初代総督のロバート・ファーカーであった。ファーカーはモーリシャスに来る前、ベナンに赴任しており、その際、華人労働者を移入した経験を有していた。彼はオランダ領東インドの華人カピタン（甲必丹）制度に似て、一人の華人に同郷人を統率する責任を負わせる方式を採用した。この役割を担った最初の華人が福建出身の陸才新（Hayme Choisanne）であった。陸才新は1826年、5人の華人を中国から連れてきて、彼らの後見人となった。1839年、陸才新はポートルイス西郊に関帝廟を建立し（写真3）、管理委員会を設置し、華人への援助・管理などにあたった。

サトウキビ・プランテーションの労働に従事していたのは、当初はアフリカから移入した奴隷であり、1835年の奴隷解放以後の代替労働力はインド人労働者であった。華人の経済活動は交易と職人仕事に限定された。19世紀末、華人人口の81.3%は商人であった。1850年以降、インド人労働者を移送する船に便乗して、モーリシャスに来る華人が増加した。

1860年までモーリシャスに来た華人は福建人と広東人であり、両者は平和に共存していた。しかし、1860年に最初の客家人が到来し、広東人と対立するようになった。同年、中国では客家人の洪秀全が主導する太平天国の乱が発生し、清朝政府により鎮圧され、1860年の北京条約締結以降、客家人の出国が加速化された。客家人は Motais Street に関羽をまつる関帝廟を建立し、梁氏堂（Liong See Tong）を設立した。客家人は果敢で進取的であり、積極的な商業活動を行い、広東人の反感をかかった。1877年、モーリシャスへの入移住制限が撤廃されると、華人の到来が増加し、その大半は客家人であった。

広東人は南海（現在の広東省佛山市南海区）と順徳（現在の広東省佛山市順徳区）、すなわち南順出身者が多かったが、広東人と客家人の対立は、1903年、関帝廟の代表をめぐって暴力



写真3 ポートルイス西郊、レ・サリール地区の関帝廟  
石獅子は、2011年12月に中国の僑務弁公室が寄贈したものである。

(2014年2月、筆者撮影)

沙汰に発展した。両者は中国本土においても、先住の「本地人」と後来の客家人の間で衝突があり、その影響も受けていた。1906年、最高裁判所の裁定により、広東人、客家人、福建人各5人による15人委員会が関帝廟の管理を担うことになり、共同指導体制になった。1909年に設立された華商公所も、共同指導体制で運営された。

### 3. 華人社会の変容と特色

次に、モーリシャスの華人社会の変容を、社会、文化、経済の各側面から考察する。

まず、方言集団の構成について検討しよう。張ほか主編（1990:20-21）によれば、早期のモーリシャスの華人の祖籍は、広東の南海および順徳が多く、その次が福建、客家人であった。前述したように南海および順徳は、あわせて「南順」とよばれた。客家人は広東の梅県（現在の広東省梅州市梅县区）が主で、そのほか豊順、蕉嶺、興寧であった。早期の福建人の多くはモーリシャスの人びとと通婚、同化した。1990年当時においてもモーリシャスの華人は、客家人が主であり、客家人の3分の2あまりは梅県人で、その次は南海人、順徳人であった。

筆者の聞き取り調査によれば、モーリシャスの華人は、フランス語系クレオール語、英語、および客家語を話すことができる者が多い。筆者が聞き取りをした華人（70歳代）は、フランス人観光客に対して、フランス語系クレオール語で会話をしていた。

次に、華人の団体（社团）について検討する。まず、地縁的な団体では、仁和会館と南順会館が代表的なものである。仁和会館（Heen Foh Lee Kwon Society）は、1872年に客家人によって設立された。1990年代、会員数200人あまりで、その多くは商店主や企業の経営者である（《華僑華人百科全書・社团政党卷》編輯委員会編、1999:305）。仁和会館は客家人優位のモーリシャスの華人社会において有力な団体で、養老院も有しており、歴史が古く、チャイナタウンの中心に位置しており、財神宝殿とよばれる廟も付設されている（写真4、5）。

南順会館は、広東の南海、順徳を祖籍とする華人によって、1859年に設立された。その前身は、ポートルイスの関帝廟の忠義堂である。1990年代初期の会員数は3,000人あまりであった（《華僑華人百科全書・社团政党卷》編輯委員会編、1999:305）。現在、南順会館は、シャン・ド・マルス競馬場の近くの住宅地域に位置している（写真6）。そのほかの地縁的団体として、1968年に客家人の団体として設立された客属会館がある。設立初期の会員数は300人あまりであった（《華僑華人百科全書・社团政党卷》編輯委員会編、1999:305）。

非地縁的な組織としては、華聯会（Hua Lian Club）がある。中華文化の弘揚、華人の聯誼、交際提供場所などを目的に1976年に設立された。1991年の会員数は609人で、公務員、弁護士、エンジニア、会計士など華人エリートの組織の一つである（《華僑華人百科全書・社区民俗卷》編輯委員会編、2000:154;《華僑華人百科全書・社团政党卷》編輯委員会編、1999:304）。また、1988年に設立された華人社団聯合会は、南順会館、広東会館をはじめ華字新聞社、学校など24の団体会員から構成されている（《華僑華人百科全書・社团政党卷》編輯委員会編、1999:304）。

宗教的団体組織として最も重要なのが、前述した関帝廟（Kwan Tee Pagoda）である。1842年に、ポートルイスの南西郊外のレ・サリーヌ（Les Salines）地区に建立された。陸才新ら5名の華人リーダーが管理し、華人の集会の場であった。華人社会の民事・司法機構の所在地で、



写真4 仁和会館のビル  
2～4階を会館施設として利用。

（Joseph River Street, 2014年2月、筆者撮影）



写真5 仁和会館内の講堂  
華人の体操教室が行われていた。

（2014年2月、筆者撮影）



写真6 南順会館

シャン・ド・マルス競馬場近くに位置し、赤色の廟である。

「1988年 雲南公司建造」の碑がある。（2014年2月、筆者撮影）

関帝廟内に法廷が設けられていた。客家人、広府人（主に南順人）、福建人の3集団が共同管理をしている（関帝廟内の案内板および《華僑華人百科全書・社区民俗卷》編輯委員会編、2000：217）。

次に華文学校についてみると、モーリシャスで最も重要な華文学校は新華学校である。同校は、1912年に広東の梅県籍の客家人によって、華文小学校として設立された。設立初期には生徒は20人あまりであった。1941年には、初級中学が併設され、校名を新華中学に改めた。1940年代、50年代には生徒数が1,000人あまりに増加し、生徒の中にはレユニオンやマダガスカル出身の華人生徒も含まれた。その後、モーリシャスでは西洋式教育を受ける華人生徒が増加し、生徒数の減少に伴い、同校は週末補習校となった。1986年から生徒数が増加し、1990年に再び「新華学校」の校名に戻った。現在は、幼児班と週末班からなり、週末班は小学部と中学部に分かれている。幼児班の児童は、毎日、英語・フランス語を学ぶほか、中国語（普通話）と客家語も学ぶ。中学部の生徒は、基本的に全日制中学の生徒である。教師の中には中国の国務院僑務弁公室から派遣された者もいる（《華僑華人百科全書・教育科技卷》編輯委員会編、1999：169）。

モーリシャスの華字紙についてみると、最初の華字紙は、1920年代に創業された「華民時報」である。同紙は1932年に、「中華日報」として改組された。1926年には「華僑商報」が創刊され、1953年に「中国時報」（1946年創刊）と合併し、「華僑時報」に改名された。1950年代、「自

由日報」,「新商報」および「國民日報」が創刊された。いずれも、資金難や読者獲得の困難などから停刊となった。1960年には「中央日報」が創刊されたが、購読者数が伸びず、10年を待たずに停刊となった。1975年には、「新商報」が「鏡報」と改名し、華字週刊紙として発行されるようになった。1990年代半ば当時、モーリシャスで発行されている華字紙は、「中華日報」,「華僑時報」および「鏡報」である(方・胡, 2002)。筆者は、「華僑時報」の発行元(34 East Anquetil Steet)で聞き取りを行った。「華僑時報」(China Times)は1953年12月10日の創刊で、購読料は毎月250ルピー(1ルピー=約3.5円)で、紙面の大きさはA3判より若干大きく、総ページ数は4頁または8頁であり、発行部数は400~600部とのことであった(写真7)。紙面の内容をみると、中国大陸、香港、台湾などの国際ニュースが中心であり、中新網、人民網などのインターネット情報の転載記事が多く、日本の安倍首相の発言内容なども掲載され、筆者が聞き取りした華人の中には、日本の政治動向にも詳しい者が少なくなかった。また、華字紙の重要な機能である華人団体の会員大会の開催通知や華人企業・商店の広告も掲載されている。

次に、華人の経済活動について検討する。1968年の独立以来、モーリシャスの政治は安定し



写真7 華僑時報の一面  
2014年2月18日の発行版。(筆者撮影)

モーリシャスにおける華人社会の変容とポートルイスのチャイナタウンの地域的特色（山下）  
ており、このことは、経済発展の好条件となってきた。基本的には、政治はインド系が実権をもっており、経済は少数の白人が大きな力を有しているという構図になっている。

1968年の独立以前、モーリシャスの経済は、製糖業に大きく依存していた。この分野では、フランス系モーリシャス人が有力であり、インド系は小規模なサトウキビ農園を経営し、華人は小売業を支配していた。独立後、モーリシャスは経済多角化政策を進め、1971年には、台湾とシンガポールをモデルに輸出加工区を設けた。その結果、ヨーロッパ共同体（現EU）やアメリカ市場へ、毛織物、衣類、繊維、履物、テレビ、冷蔵庫、玩具、プラスチック製品を生産した輸出加工区は、製糖業をしのぐ雇用創出産業、輸出産業に成長した（Pan ed., 1998: 351-355）。

国立中正大学編（2012: 571）によれば、華人の職業は商業が主であり、卸業、工業、貿易、商務代理などが多い。華人青年は欧米留学の後に帰国して、多くは医師、会計士、弁護士、裁判官などの社会的要職に就く者が少なくない。台湾との関係では、モーリシャスは遠洋漁業の重要な補給基地の役割を果たし、台湾漁船への関連サービスも重要である（中華経済研究院編、2004: 288）。

最近の傾向として、中国資本の進出が目立つ。台湾発行の中華経済研究院編（2004: 287-288）は、近年（発行当時）、中国の国営あるいは民営の企業のモーリシャスへの進出が著しく、綿紡績、縫製業、不動産業などのほかに、医師、会計士、エンジニアなども進出していると述べている。

観光業の発展に伴い、中国企業や最近中国から来た新華僑の観光業への進出は、景観的にも認められる。ポートルイス港に1996年に建設されたショッピングセンターであるル・コーダン・ウォーターフロント・コンプレックス（Le Caudan Waterfront Complex）には、大規模な中国料理店や華人経営のみやげ店などが入り、中国人観光客が訪れている。モーリシャス島の北部地域のリゾートタウンであるグラン・ベ（Grand Baie）のショッピングセンター内には、2014年春節<sup>5)</sup>の竜の飾りが掲げられていた（写真8）。

新華僑の増加は世界的にも注目されるが（Yamashita, 2013）、モーリシャスにおいても増加している。丘主編（2012: 9-14）によれば、アフリカの53カ国、華人人口、約75万人のうちの90%前後が改革開放後中国から海外に出た新華僑で、その多くは浙江、広東、福建などの省の出身である。最多は南アフリカで約30万人、うち10万人は新華僑である。マダガスカル6万人（うち新華僑1万人）、ナイジェリア5万人（うち新華僑2,100人）、次がモーリシャス4万人で、うち新華僑は1万人と推測している。



写真8 グラン・ベのショッピングセンター“Super U”の中の春節の飾り  
(2014年2月, 筆者撮影)

### Ⅲ. ポートルイスにおけるチャイナタウンの地域的特色

#### 1. ポートルイスおよびチャイナタウンの周辺

2011年の人口センサスでは、ポートルイスの人口は118,431人(同国人口の9.6%)を有し、モーリシャスの最大都市であり(Statistics Mauritius, 2011 Housing and Populations)、同国の華人の最大の集住地域である。

葛主編(2013:213-214)によれば、2009年のモーリシャスの華人は38,000人で、総人口の2.9%に相当し、華人の半数以上は首都ポートルイスに居住している。華人の経済活動では商業が中心であり、華人はモーリシャス経済の10%を占めると述べている。

イギリス植民地時代に丘の上に建設されたアデレード砦(Fort Adelaide)に上ると、ポートルイスの中心部と港湾を見晴らすことができる(写真9)。アデレード砦がある丘の周辺には、「吉祥如意」や「福」などの文字を書いた赤い紙を貼ったり、対聯を玄関に掲げた華人の住宅がみられる。

ポートルイス港は砂糖の輸出港として繁栄してきた。港湾の近代化も進められ、1996年には、前述したル・コーダン・ウォーターフロント・コンプレックスが建設され、現地の富裕層や外国人観光客向けのショッピングセンターになっている。ここには、大海京酒家(Grand Ocean City)のような大規模な中国料理店やカジノも設けられ、記念写真を撮る中国人観光客の姿がよくみられる(写真10)。



写真9 アデレード岩からみたポートルイスの中心部と港

(2014年2月, 筆者撮影)



写真10 ル・コーダン・ウォーターフロント・コンプレックス

(2014年2月, 筆者撮影)

プラス・ダルム (Place d'Armes) 広場周辺には多くの銀行が集中し、ポートルイスは、アフリカではヨハネスブルクに次ぐ金融の中心地ともいわれる (図3)。ポートルイス中心部のランドマークとして、セントラル・マーケット、ジュマ・モスク (Jumah Mosque)、そしてチャイナタウンなどがあげられよう。セントラル・マーケットは、野菜・果物・魚・肉の4棟から構成されており、大勢の人出でにぎわっている (写真11)。セントラル・マーケットの営業時間は平日・土曜は朝5:30から午後5:30まで、日曜は朝5:30から午前11:30までである。

セントラル・マーケットの周辺から、東北部に向けて華人商店が多く見られ、チャイナタウンが形成されている。また、前述したように、ポートルイスの中心部から西へ1kmあまりの住宅地域に、関帝廟と客家人の仁和会館の廟が位置している。この仁和会館の廟の横には、孫中山像と海外華人記念碑が設置されている。市中心の北西には広東の南海および順徳出身者によって建てられた南順会館がある。

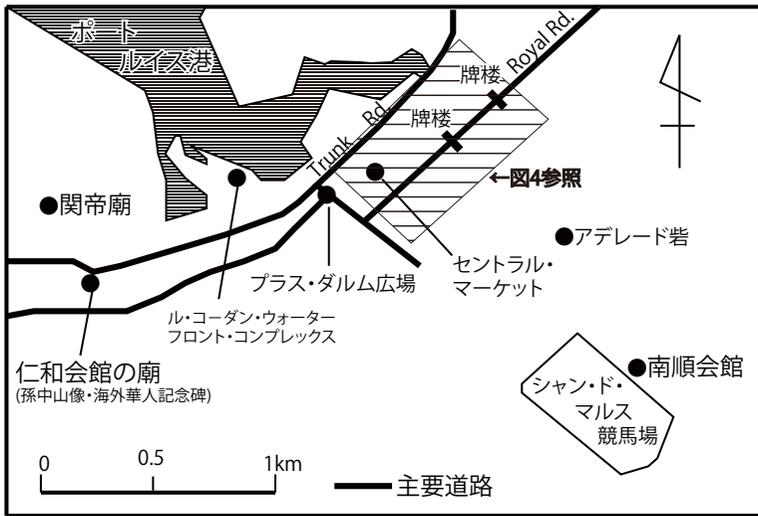


図3 ポートルイス  
チャイナタウンはロイヤル・ロード (Royal Road) 周辺に形成されている。  
(2014年2月の現地調査により筆者作成)



写真11 セントラル・マーケット  
買い物客はインド系、クレオール、華人など多様である。  
(2014年2月、筆者撮影)

## 2. チャイナタウンの地域的特色

ポートルイスのチャイナタウンのメインストリートは、ポートルイスの中心から東北に走るロイヤル・ロード（Royal Road, 中国語名：禾燕街）である。ロイヤル・ロードと平行に走るクイーン・ストリート（Queen Street, 皇后街）および、ロイヤル・ロードと直行するコーデリー・ストリート（Corderie Street）、ルイス・パスツール・ストリート（Louis Pasteur Street）、ジマ・モスク・ストリート（Jumma Mosque Street）、ジョセフ・リバー・ストリート（Joseph River Street）、エマニュエル・アंकティル・ストリート（Emmanuel Anquetil Street）、孫中山博士・ストリート（Dr. Sun Yat Sen Street, 中山街）などに、中国料理店、雑貨店、漢方薬、旅行会社などの多数の華人店舗が立地している。店舗の看板は、繁体字の漢字で書かれ、英語やフランス語が併記されている（写真12）。また、仁和会館、古城会館、黃氏宗親会などの華人関係団体、華文学校である新華学校、華字紙の華僑時報の発行所などが集積している。

チャイナタウンのシンボルは、バスをはじめ車両の通行が多いロイヤル・ロードに建てられた2基の牌楼である。この牌楼は、中国の広東省仏山市とポートルイス市が協力して建てたも



写真12 チャイナタウンの華人商店  
繁体字の漢字と英語を併記した看板が特色である。  
写真は Queen Street と Louis Pasteur Street 付近。  
(2014年2月, 筆者撮影)

のであり、牌樓の建設碑には、「中華人民共和国広東省仏山市 毛里求斯路易港市 共同建立 1995 年秋」と書かれている。ポートルイスの広東人の主要な出身地である南海および順徳は、現在の仏山市に含まれている。牌樓の額には、「唐人街 China Town」(Chinatown ではない)と書かれている(写真 13)。南側の牌樓の傍には、イスラム教のジュマ・モスク(Jumma Mosque)があり、ヒンドゥー教徒のインド系住民が多数を占めるモーリシャスにおいて、エスニック集団の多様性を象徴している。

ポートルイスのチャイナタウンは、華人のみならずモーリシャスの国民にとって、重要な商業地区としてにぎわっている。販売されている商品は、外国製の輸入した小物・雑貨を取り扱う店が多い。チャイナタウンの華人店舗は、午後4時くらいになると閉店するものが多く、それ以後、チャイナタウンの人通りも少なくなる。

チャイナタウンの華人店舗の中で最も目立つ店舗は、中国料理店である。なかでも、ロイヤル・ロードとコーデリー・ストリートの角に位置する第一飯店(The First Restaurant)は規模が大きく、チャイナタウンを代表する老舗の中国料理店である(写真 14)。華人経営者からの聞き取りによれば、1951年に開業し、現在、広東省湛江出身のコックを招聘している。モーリシャスを訪問する外国人観光客は多いが、彼らは海岸リゾートのホテルに滞在しており、ポートルイスの同店を訪れる者は多くはないという。ロイヤル・ロードの「麺」(Noodle Square)という新しい中国料理店の経営者も老華僑であり、従業員は黒人のクレオールである。雲吞麵(ワンタンメン)は120ルピー(約630円)であった。



写真 13 ロイヤル・ロードの牌樓  
2基ある牌樓のうち、南側のもの。「唐人街 China Town」と書かれている。  
(2014年2月、筆者撮影)

モーリシャスにおける華人社会の変容とポートルイスのチャイナタウンの地域的特色（山下）

チャイナタウンは、商業面だけでなく、華人の居住地としての機能も重要である。広東の南順人の南順会館によって建てられた8階建ての南順世襲大厦（Nam Shun Society Building）は Heritage Court というマンションであり、1~3階には中国料理店をはじめとする店舗が入っている。入口の両側には、中国国務院僑務弁公室から贈られた一对の石獅子がある。

チャイナタウンの景観をみると、東南アジアのチャイナタウンと同様、ポートルイスのチャイナタウンの商店の建物は、1階が店舗用、2階が居住用というショップハウスが一般的であるが（山下、1987：62-66）、2階部分がベランダのようなテラス形式になっている例が多いのが特徴である（写真15）。チャイナタウン内の主要な街路には、「Dr. Sun Yat Sen St. 中山街」<sup>6)</sup>



写真14 ロイヤル・ロード沿いの第一飯店  
写真右奥に牌楼（写真13）がある。  
(2014年2月、筆者撮影)



写真15 チャイナタウンのショップハウス  
1階が店舗、2階は居住用になっている。  
(2014年2月、筆者撮影)

のように、英語の街路名に漢字の街路名が併記されている。

中国料理店を経営し、華人団体の要職を務める華人からの聞き取りによると、華人青年は、海外に留学することを好み、留学終了後は帰国せず、海外に留まる者が少なくない。留学先として人気があるのはオーストラリアで、欧米に比べ学費が安いためである。留学という形式以外でも、より良い仕事を求めて、海外に働きに出る者も多い。華人青年は高等教育を受け、専門職へ就く者が多く、チャイナタウン内にある華人経営の商店の間では、後継者難が深刻な問題になっているという。

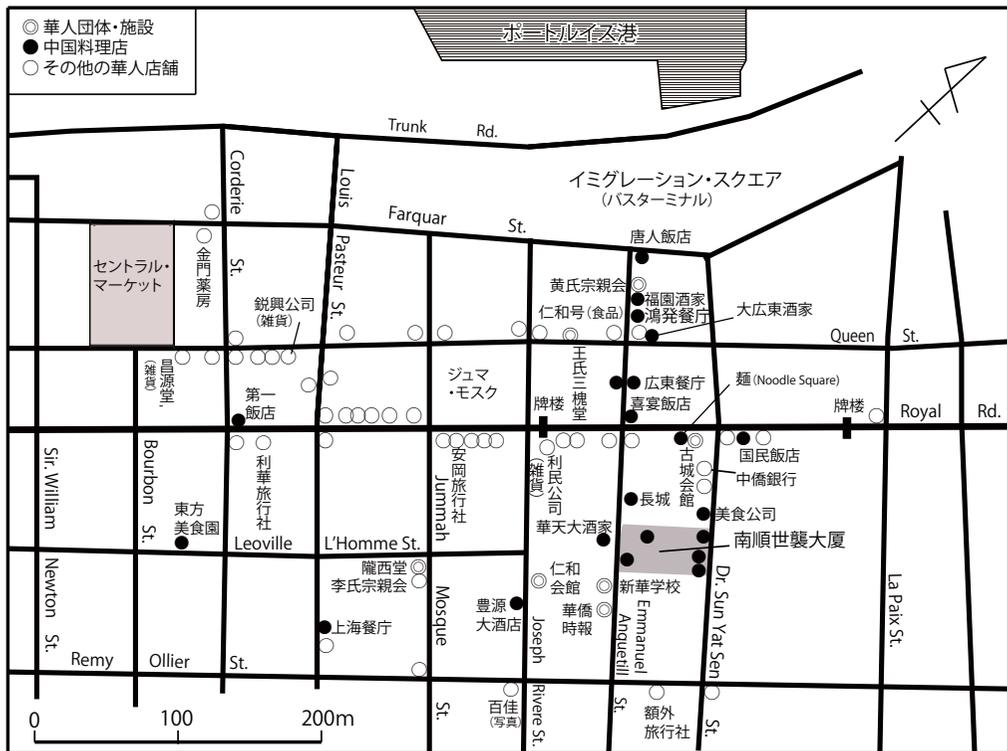


図4 ポートルイスのチャイナタウン

(2014年2月の現地調査により筆者作成)

#### Ⅳ. おわりに

本研究では、2014年2月の現地調査にもとづき、モーリシャスの華人社会の変容を考察するとともに、ポートルイスのチャイナタウンの地域的特色を明らかにすることを試みてきた。その結果、明らかになったことは、以下のようにまとめることができよう。

1715年、フランスがモーリシャスを占領し、アフリカ奴隷を導入し、サトウキビ生産を軌道に乗せた。その後、イギリスがモーリシャスを占領し、奴隷制廃止に伴い、インド人契約労働者を大量に移入し、サトウキビ・プランテーションおよび製糖業が発展した。しかし、華人の経済活動の中心は商業であった。

1860年までモーリシャスにきた華人は福建人と広東人であり、その後、広東の梅県地方出身の客家人が増加し、客家人がモーリシャスの華人社会の中心をなすようになった。その次に多いのは南海と順徳すなわち南順出身の広東人である。モーリシャスの華人は、フランス語系クレオール語、英語、および客家語を話すことができる者が多い。また、関帝廟のほか客家人の仁和会館、広東人の南順会館、華文学校の新華学校、華字紙の華僑日報など、華人社会の伝統が継承されている。

首都ポートルイスにはチャイナタウンが形成され、そのメインストリートのロイヤル・ロードには、2基の牌楼が設けられている。チャイナタウンでは、中国料理店をはじめ、雑貨店、漢方薬、旅行会社などの華人店舗が多数立地し、景観的には、繁体字の漢字で書かれた看板やショップハウスなど、チャイナタウンとしての伝統的な景観がみられる。

本稿では、十分な考察ができなかったが、今後、モーリシャスへの中国資本の投資や新華僑の動向が、モーリシャスの華人社会を考察する上で重要な課題になるとと思われる。

#### 〔附記〕

本研究を遂行するにあたり、平成23～26年度日本学術振興会・科学研究費補助金基盤研究(A)「日本社会の多民族化に向けたエスニック・コンフリクトに関する応用地理学的研究」(課題番号232420522, 研究代表者: 山下清海)の研究費の一部を使用した。

#### 注

- 1) 『理科年表 平成26年』(丸善出版, 2014)によれば、モーリシャスの観測地点、Plaisance(標高55m)の年平均気温は23.9℃(1981~2010年)、年平均降水量は1599.1mm(1982~2010年)である。
- 2) CIA World Factbookは、モーリシャスのエスニック・コミュニティの構成について、インド系68%、クレオール27%、華人3%、フランス系2%と推定している(The Central Intelligence Agency, The World Factbook)。
- 3) 西野(1968)は、1968年にイギリス植民地から独立した直後のモーリシャスの状況を記述している。

4) 東京に設けられたモーリシャス観光局のホームページでは、日本人観光客を誘致するために、モーリシャス観光の魅力を次のようにアピールしている。

「インド洋の貴婦人 モーリシャス」は世界トップクラスのビーチリゾートとして日本の皆様からも憧れの旅行先と高い評価をいただいています。安定した政治、治安、アフリカ唯一の経済力、整備保全された自然環境、国民性に根づいたホスピタリティ等がその魅力とされていますが、観光客の最も高い評価の決め手はホテルライフの充実度です。宿泊設備、食事、スポーツ施設等個々のレベルは当然、総合的に最高級のサービスをご提供できるのがモーリシャスです。

5) モーリシャスはアフリカの中で唯一、中国の旧正月である春節が法定の祝日となっている国である。

6) 辛亥革命の成功を導き、中華民国の臨時大總統となった孫文は、中国や海外の華人社会では、一般に「孫中山先生」とよばれる。欧米では Sun Yat-sen (孫逸仙の広東語のローマ字表記) とよばれることが多い。

## 参考文献

- 杉本星子 (1999) : 契約労働者からインド・モーリシャスへーイギリス議会文書・植民地報告 (1862-1882) にみるモーリシャスのインド系移民. 人間・文化・心 : 京都文教大学人間学部研究報告, 2, 183-199.
- 寺谷亮司 (2003) : モーリシャス共和国の人文・自然環境 (1). 愛媛大学法文学部論集 人文学科編, 14, 65-103.
- 寺谷亮司 (2004) : モーリシャス共和国の酒類産業と飲食文化. 日本醸造協会誌, 99 (1), 16-30.
- 寺谷亮司 (2005) : ヨーロッパ・アフリカ・アジア文化が交錯する都市—モーリシャス共和国のポートルイス, カトルボーン—. 愛媛大学公開講座「世界の都市」編集委員会編 : 『世界の都市 (3) —その歴史と文化—』 19-23.
- 寺谷亮司 (2008) : モーリシャス—インド洋の島嶼地域—. 池谷和信・武内進一・佐藤廉也編 : 『朝倉世界地理講座—大地と人間の物語— 12 アフリカⅡ』 朝倉書店, 823-837.
- 戸谷 洋・赤坂 賢・小田英郎・林 晃史 (2010) : モーリシャス. 小田英郎・川田順造・伊谷純一郎・田中二郎・米山俊直編 : 『新版 アフリカを知る事典』 平凡社, 665-668.
- 西野照太郎 (1968) : モーリシャスの現状. レファレンス, 18 (9), 53-66.
- 堀内清司 (1995) : モーリシャス共和国. 福井英一郎編 : 『世界地理 10 アフリカⅡ』 朝倉書店, 375-383.
- 山下清海 (1987) : 『東南アジアのチャイナタウン』 古今書院.
- 山下清海 (2000) : 『チャイナタウン—世界に広がる華人ネットワーク—』 丸善.
- 山下清海 (2002) : 『東南アジア華人社会と中国僑郷—華人・チャイナタウンの人文地理学的考察—』 古今書院.
- 山下清海 (2007) : ブラジル・サンパウロ—東洋街の変容と中国新移民の増加—. 華僑華人研究, 4, 81-98.
- 山下清海 (2009) : インドの華人社会とチャイナタウン—コルカタを中心に—. 地理空間, 2, 32-50.
- 山下清海 (2010) : 『池袋チャイナタウン—都内最大の中華僑街の実像に迫る—』 洋泉社.
- Chang, Sen Dou (1968) : The distribution and occupations of overseas Chinese. *Geographical Review*, 58, 89-107.
- Christopher, A. J. (1992) : Ethnicity, community and the census in Mauritius, 1830-1990. *The Geographical Journal*, 158, 57-64.
- Ma, L. J. C. and Cartier, C. eds. (2003) : *The Chinese diaspora: Space, place, mobility, and identity*. Rowman & Littlefield Publishers, Oxford.

モーリシャスにおける華人社会の変容とポートルイスのチャイナタウンの地域的特色 (山下)

- Pan, Lynn ed. (1998): *The encyclopedia of the Chinese overseas*. Chinese Heritage Centre, Singapore.  
潘翎主編, 崔貴強編譯 (1998): 『海外華人百科全書』三聯書店 (香港), 香港. パン, リン編, 游 仲  
勳監訳 (2012): 『世界華人エンサイクロペディア』明石書店.  
Yamashita, Kiyomi (2013): A Comparative study of Chinatowns around the world: Focusing on the  
increase in new Chinese immigrants and formation of new Chinatowns. *Japanese Journal of  
Human Geography* (人文地理), 65, 527-544.

[中国語文献 (著者のピンイン順)]

- 陳翰笙主編 (1984): 『華工出国史料匯編 第八輯 第九輯 第十輯』中華書局出版, 北京.  
方積根編 (1986): 『中国華僑歴史学会資料叢書 非洲華僑史資料選輯』新華出版社, 北京.  
方積根・胡文英 (2002): 毛里求斯華僑華人概述《華僑華人百科全書・歴史卷》編輯委員會編: 『華僑華人  
百科全書・歴史卷』中国華僑出版社, 北京, 281-289.  
葛蘭主編 (2013): 『華人經濟年鑑 (2012~2013)』中国華僑出版社, 北京.  
国立中正大学編 (2012): 『2011 華僑經濟年鑑』中華民國僑務委員會, 台北.  
《華僑華人百科全書・教育科技卷》編輯委員會編 (1999): 『華僑華人百科全書・教育科技卷』中国華僑出版  
社, 北京.  
《華僑華人百科全書・歴史卷》編輯委員會編 (2002): 『華僑華人百科全書・歴史卷』中国華僑出版社, 北京.  
《華僑華人百科全書・社区民俗卷》編輯委員會編 (2000): 『華僑華人百科全書・社区民俗卷』中国華僑出版  
社, 北京.  
《華僑華人百科全書・社団政党卷》編輯委員會編 (1999): 『華僑華人百科全書・社団政党卷』中国華僑出版  
社, 北京.  
李安山 (2000): 『非洲華僑華人史』中国華僑出版社, 北京.  
李原・陳大璋編 (1991): 『海外華人及其居住地概況』中国華僑出版公司, 北京.  
丘進主編 (2012): 『華僑華人藍皮書 華僑華人研究報告 (2012)』社会科学文献出版社, 北京.  
沈立新 (1992): 『世界各国唐人街紀實』四川人民出版社, 成都.  
吳景明編 (2009): 『世界著名華人街区-唐人街』吉林人民出版社, 長春.  
張興漢・陳新東・黃卓才・徐位發主編 (1990): 『華僑華人大觀』暨南大学出版社, 廣州.  
中華經濟研究院編 (2003): 『華僑經濟年鑑-亞太篇 中華民國90年~91年版』中華民國僑務委員會, 台北.

モーリシャス観光局 <http://www.mauritius.ne.jp/> (最終閲覧日: 2014年12月18日)

Mauritius, Handbook of Statistical Data on Tourism 2013

<http://tourism.govmu.org/English/Documents/handbook2013.pdf> (最終閲覧日: 2014年12月18日)

The Central Intelligence Agency, The World Factbook

<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/mp.html> (最終閲覧日: 2014年  
12月18日)

Statistics Mauritius, 2011 Housing and Populations

<http://statsmauritius.govmu.org/English/Pages/2011-Housing-and-Populations-.aspx> (最終閲覧  
日: 2014年12月18日)

立命館国際研究 27-4, March 2015

仏山市順徳区外事僑務局, 模里西斯南順会館, 2009年4月9日

<http://61.142.131.12:82/gate/big5/sdshgz.shunde.gov.cn/data/main.php?id=1164-7270089> (最終閲覧日:  
2014年12月18日)

(山下 清海, 筑波大学生命環境系地球環境科学専攻教授)

## Transformation of the Chinese community in Mauritius and the regional characteristics of the Port Louis Chinatown

Based on the author's fieldwork in February 2014, this study considers the transformation of the Chinese community in Mauritius, and tries to clarify the regional characteristics of the Port Louis Chinatown.

In 1715, France occupied Mauritius and brought African slaves to work on the sugarcane plantations. Britain then occupied Mauritius, and with slavery abolished, put many Indian contract laborers to work on the sugarcane plantations. In contrast, the economic focal point of the Chinese immigrants was commercial.

Most Chinese who came to Mauritius, until 1860, were Hokkiens from Fujian Province, and Cantonese from the Pearl River Delta in Guangdong Province. Later, the number of Hakkas from the Meixian County increased to the point where they became the majority among the Chinese community in Mauritius.

Many Chinese in Mauritius can speak French Creole, English and the Hakka dialect. Traditional Chinese cultural influences, such as temples, associations, newspapers and schools have been successful in Mauritius.

The Chinatown of Mauritius is in the capital, Port Louis. Two Chinatown gates were established on Royal Road, the community's main street. In this Chinatown, there are many Chinese restaurants and stores, such as general shops, drug stores and tour companies. An important function of Chinatown is to form the center of traditional Chinese culture, as well as the commercial hub for the local people in Mauritius.

(YAMASHITA, Kiyomi, Professor, Department of Geoenvironmental Sciences,  
Faculty of Life and Environmental Sciences, Tsukuba University)

